

中学校入学時の英語学習に対する 意識及び英語能力について 小学校英語教育の成果を探る⁽¹⁾

高橋 美由紀
(愛知教育大学)
柳 善和
(名古屋学院大学)

1. 本研究の目的

文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を提案し、英語教育の改善・充実方策として、以下の英語教育改革の5つの提言をしている（文部科学省 2014）。

改革 1. 国が示す教育目標・内容の改善

改革 2. 学校における指導と評価の改善

改革 3. 高等学校・大学の英語力の評価及び入学者選抜の改善

改革 4. 教科書・教材の充実

改革 5. 学校における指導体制の充実

「改革 1. 国が示す教育目標・内容の改善」では、小・中・高を通して、
1. 各学校段階の学びを円滑に接続させる、2. 「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標（4技能に係る具体的な指標の形式の目標を含む）を示す（具体的な学習到達目標は各学校が設定）ことが挙げられている（文部科学省 2014）。そして、小学校では、中学年

から外国語活動を開始し、音声に慣れ親しませながらコミュニケーションの素地（そじ）を養うとともに、ことばへの関心を高めること、さらに、高学年では身近なことについて基本的な表現によって「聞く」「話す」ことなどに加え、「読む」「書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うといった学習の系統性を持たせるため教科として行うことが求められる（文部科学省 2014）。

これらのことを踏まえ、本研究では、(1)小学校英語教育の成果について、英語学習に対する意識及び英語能力という 2 つの観点からどこまで成果が上がっているかを調査する。また、(2)この結果を基にして、現在の「外国語活動」の成果を確認し、あわせて限界や問題点を論じ、次の時代の小学校英語教育のあり方を学習指導要領も含めて探りたい。

2. 研究の背景

2.1. 「小学校外国語活動」と「中学校英語教育」の評価規準

表 1 は、現在の学習指導要領における「小学校外国語活動」と「中学校外国語科」の評価規準である。

小学校から中学校へ円滑に接続することが求められているが、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」については小学校と中学校は同じ観点・趣旨である。一方、小学校の「外国語への慣れ親しみ」に対して、中学校の「外国語表現の能力」・「外国語理解の能力」、及び、小学校の「言語や文化に対する気付き」に対して中学校の「言語文化についての知識・理解」等の内容は異なっている。この様に、小学校外国語活動と中学校外国語科（英語）が接続していないことが確認できる。

表 1：小学校外国語活動と中学校外国語科の評価の観点と趣旨

＜小学校外国語活動＞				
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ		言語や文化に対する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。		外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。
＜中学校外国語＞				
観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的に言語活動を行い、コミュニケーションを図ろうとする。	外国語で話したり書いたりして、自分の考えなどを表現している。	外国語を聞いたり読んだりして、話し手や書き手の意向などを理解している。	外国語の学習を通して、言語やその運用についての知識を身に付けているとともに、その背景にある文化を理解している。

2.2.文部科学省（2013）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」

新しい小学校英語教育では、学習の開始学年をこれまで5年生であったものを、3年生に引き下げることとなった。そして、3・4年生では「活動型」で週1～2コマ程度を、5・6年生では「教科型」で週3コマ程度行うことになった。文部科学省は2015年度より全国の研究開発校で「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」に基づいた「教科型」の小学校英語教育を実施することになっている。

「目標・取り扱う内容・評価」についても改訂され、1.「英語を用いて何ができるようになるか」という観点から目標を具体化し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定する、2.言語活動の内容（聞き取り、多読、速読、作文、発表、討論等）や量を増加、3.「英語を用いて～することができる」という形式による目標設定（CAN-DO リスト）に対応す

る形で 4 技能を評価、4.我が国や郷土の伝統や文化について 英語で伝えるという視点も含める、としている（文部科学省 2013）。

一方、2011 年度から小学校外国語活動が必修化されており、現在、「小学校で英語に慣れ親しんだ」児童が中学校に進学しており、中学校では、小学校での外国語活動や英語教育の経験を活かした教育が求められている。そのために、中学校では、小学校の現状でどこまで教えられているかを把握することが必要である。また、これまでの外国語活動では「知識・技能の蓄積」は求められていないが、次の教育課程では小・中・高等学校と一貫した教育目標や内容が求められており、「英語の技能面」を抜きにして考えることは出来ない。

3. 意識及び英語運用能力調査

3.1.調査について

筆者らは、小学校外国語活動を経験した生徒の学習経験や彼らの英語運用能力を把握するために以下の調査を行った。

調査はアンケート形式とテスト形式の両方で実施した。

- (1) 調査協力者：小学校 1 年生から外国語活動を経験している A 県 I 市立中学校 1 年生 279 名(学区内には小学校が 4 校ある)
- (2) 調査時期：2014 年 4 月～5 月（ALT が参加した最初の授業で調査）
- (3) 内容：
 - ① 質問紙：小学校外国語活動の学習内容、生徒の英語学習。
 - ② CAN-DO リスト：英語の基礎的運用能力を生徒が自己評価。
 - ③ テスト：ALT の英語の質問に対して書いて答える形式で調査。
 - ④ 聞き取り：入学時の生徒の様子について担当教師に聞き取りを行

った。

①質問紙では、以下の内容をアンケート形式（1～4）とテスト形式（5）で尋ねた。

1. 学校以外で英語を習っていましたか？
2. 小学校で外国語活動は楽しかったですか？
3. CAN-DO リスト形式による 13 の自己評価項目。
4. 小学校の外国語活動で楽しかった活動を 5 つ書いてください。
5. 英語コミュニケーション能力試験

3.2. CAN-DO リストによる自己評価

「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、「英語を用いて何ができるようになるか」という観点から目標を具体化し、小中高を通じて一貫した学習到達目標を設定すること、及び、「英語を用いて～することができる」という形式による目標設定（CAN-DO リスト）に対応する形で 4 技能を評価することと示されている（文部科学省 2013）。

筆者らは、生徒達が調査に回答していく過程で自己評価ができ、次の学習ステップを彼ら自身で把握できることから、以下の様な項目で「CAN-DO リスト」を作成した。なお回答は 4 件法で行った。

- (1) 先生や友達が、ゆっくりはっきりと英語を話してくれれば、その内容がわかった。
- (2) 英語の文字が発音されるのを聴いて、どの文字かわかった。
- (3) 小学校のテキストや中学校の教科書等で、自分の知っている英語の単語があった。

- (4) アルファベットの大文字がわかった。
- (5) アルファベットの小文字がわかった。
- (6) 「インタビュー・ゲーム」等では、先生や友達に英語で自分の気持ちを伝えることができた。
- (7) 「インタビュー・ゲーム」等では、友達とやり取りが英語できた。
- (8) 授業の始まりや終わりの挨拶が英語でできた。
- (9) 自己紹介（名前、年齢等）を英語ですることができた。
- (10) 自分の好きなものや趣味、持ち物について、皆の前で英語で話すことができた。
- (11) アルファベットの大文字・小文字を書くことができた。
- (12) 先生の話す「英語の単語の各々のアルファベット文字、(例えば、C (シー)・A (エイ)・T (ティ)) 等」を聞いて、その通り書くことができた。
- (13) 英語を見て、書き写すことができた。

3.3. 英語コミュニケーション能力試験について

生徒のコミュニケーション能力、及び、英語の文字学習を把握するために、以下のテストを実施した。

コミュニケーション能力を測るために、全ての生徒一人一人と会話し評価することは時間的に不可能であったため、ALT の質問を聞いて、生徒自身が「自分のことを答える。」という形式にした。なお、「答えは英語でなくてもカタカナでもいい」こととした。実施した問題は以下の通りである。

5. 先生の話す英語を聞いて、自分のことを答えよう。(英語でなくてもカタカナでもいいです)

- ①(教師の音声) Hello. How are you?
- ②(教師の音声) Do you like apples ?
- ③(教師の音声) What color do you like?
- ④(教師の音声、リコーダー等の一部を見せて) What's this?
- ⑤(教師の音声) Do you have notebooks ?
- ⑥(教師の音声) Can you swim?
- ⑦(教師の音声) What time do you get up?

小学校外国語活動では、文字の扱いについて「アルファベットなどの文字の指導については、例えば、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめるなど、中学校外国語科の指導とも連携させ、児童に対して過度の負担を強いることなく指導する必要がある」「アルファベットなどの文字指導は、外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある。」と示されている(文部科学省 2008 : p.19)。これらのことから、小学校外国語活動で「触れる段階」の文字指導と中学校外国語科との連携で、アルファベットの「文字を書く」ことを、どれくらい生徒ができるのかを調査した。実施した問題は以下の通りである。

6. 先生の英語を聞いて、アルファベットの大文字を書いてみましょう。

- ① (教師の音声) C ② (教師の音声) J ③ (教師の音声) Q
- ④ (教師の音声) W ⑤ (教師の音声) L

7. 先生の英語を聞いて、アルファベットの小文字を書いてみましょう。

- ① (教師の音声) f ② (教師の音声) t ③ (教師の音声) m
④ (教師の音声) r ⑤ (教師の音声) a

「読むこと書くことについては、音声面を中心とした指導を補助する程度の扱いとするよう配慮し、聞くこと及び話すこととの関連を持たせた指導をする必要がある」と示されている(文部科学省 2008:p.19)。そのため、今回は、文部科学省で配布されている教材『Hi, friends!』に掲載されている英語の文字から、生徒が外国語活動だけでなく、日常生活においても音声で慣れ親しんでいると思われる語彙を 10 語選んで、「読むこと」について調査した。「読むこと」の調査は一人一人語彙を発話させることが理想であるが、時間的に困難であったので「読み方」をカタカナで表記することとした。実施した問題は以下の通りである。

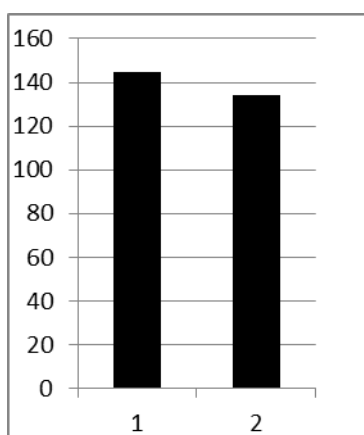
8. この単語の読み方をカタカナで書きなさい。

- ① TV ② Hello ③ ball ④ green ⑤ Bookstore
⑥ Game ⑦ Police ⑧ happy ⑨ TAXI ⑩ POST

3.4. 結果

調査結果を以下の様なグラフで表した。

1. 学校以外で英語を習っていましたか？

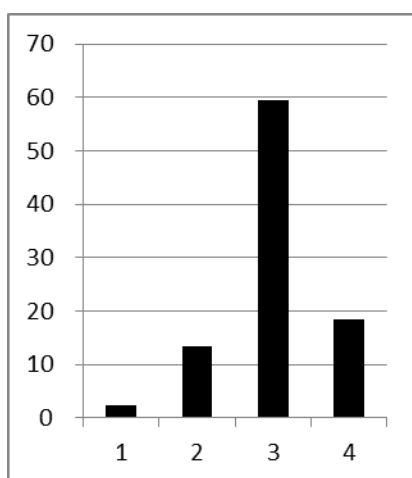


学校外英語学習 (人)

1. あり 2. なし

2. 小学校で外国語活動は楽しかったですか？

小学校外国語活動について(%)

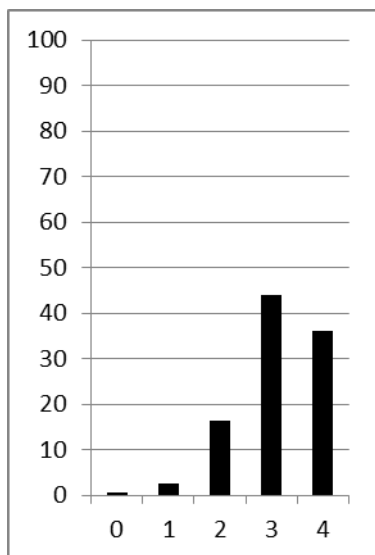


1. 全くつまらなかった
2. つまらなかった
3. 楽しかった
4. とても楽しかった

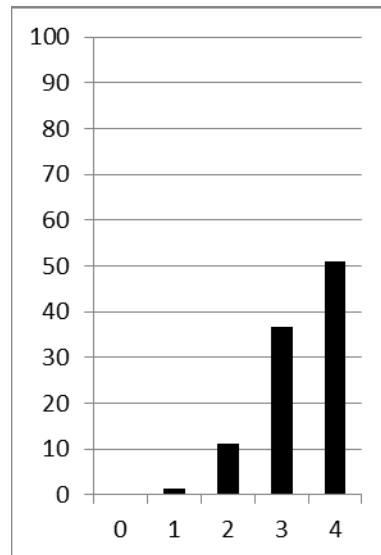
3. CAN-DO リスト自己評価について

(1)～(13)のグラフについては百分率(%)で表示してある。また、凡例は、
1.全くわからなかった、2.あまりわからなかった、3.わかった、4.よくわかった、0. 無回答、としている。

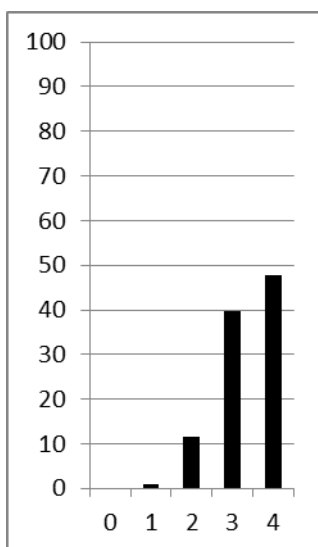
3(1) 先生や友達が、ゆっくりはっきりと英語を話してくれれば、その内容がわかった。



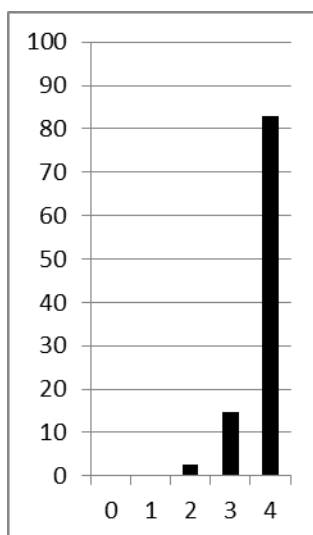
(2) 英語の文字が発音されるのを聴いて、どの文字かわかった。



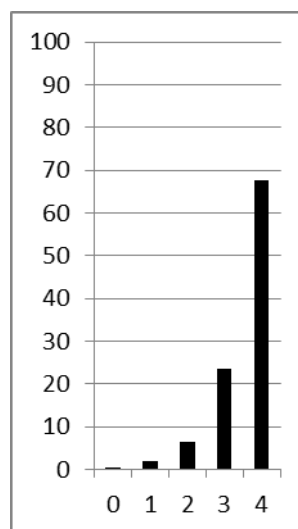
(3) 小学校のテキストや中学校の教科書等で、自分の知っている英語の単語があった。



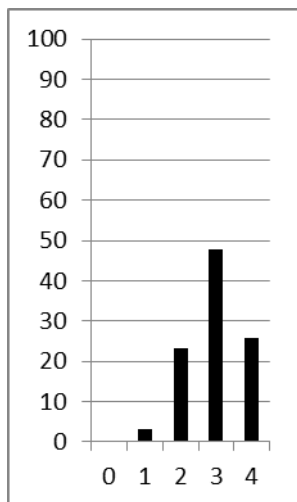
(4) アルファベットの大きな文字がわかった。



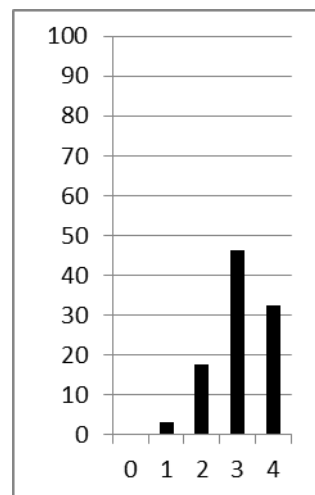
(5) アルファベットの小さな文字がわかった。



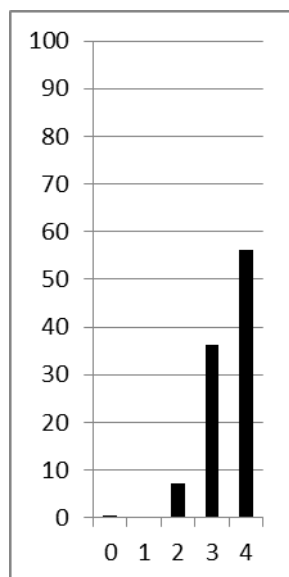
(6)「インタビュー・ゲーム」等では、先生や友達に英語で自分の気持ちを伝えることができた。



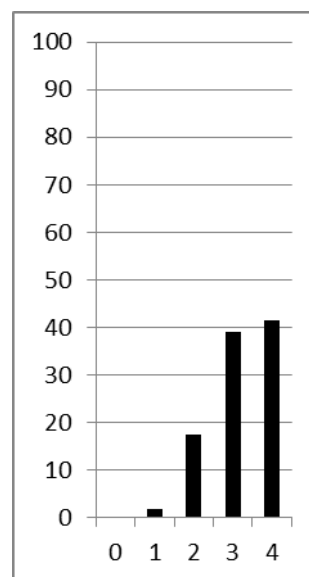
(7)「インタビュー・ゲーム」等では、友達とやり取りが英語できた。



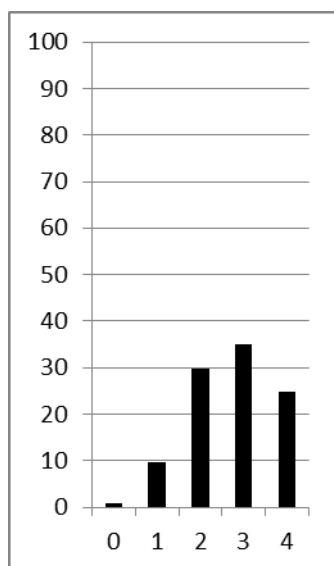
(8)授業の始まりや終わりの挨拶が英語でできた。



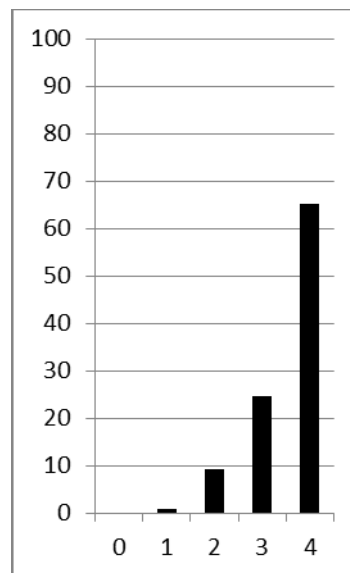
(9)自己紹介（名前、年齢等）を英語ですることができた。



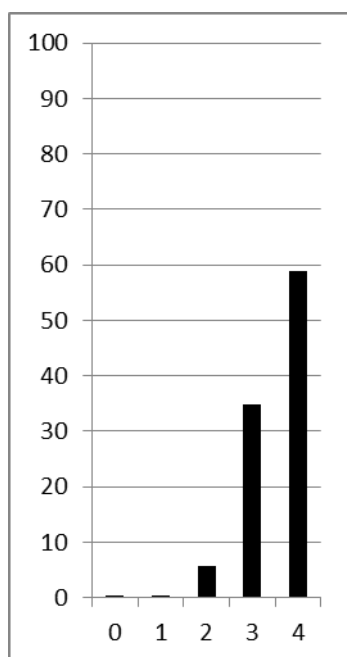
(10)自分の好きなものや趣味、持ち物について、皆の前で英語で話すことができた。



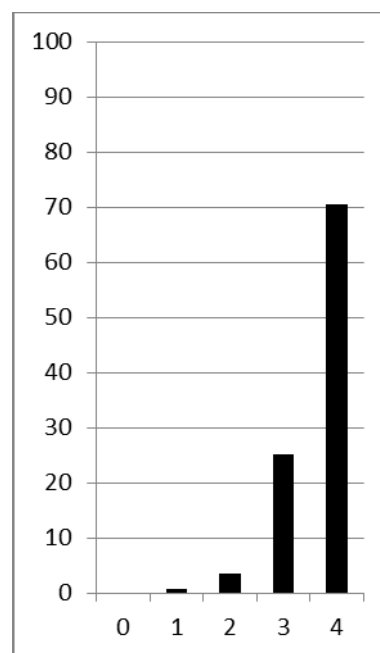
(11) アルファベットの大文字・小文字を書くことができた。



(12)先生の話す「英語の単語の各々のアルファベット文字、（例えば、C（シー）・A（エー）・T（ティ）等）」を聞いて、その通り書くことができた。

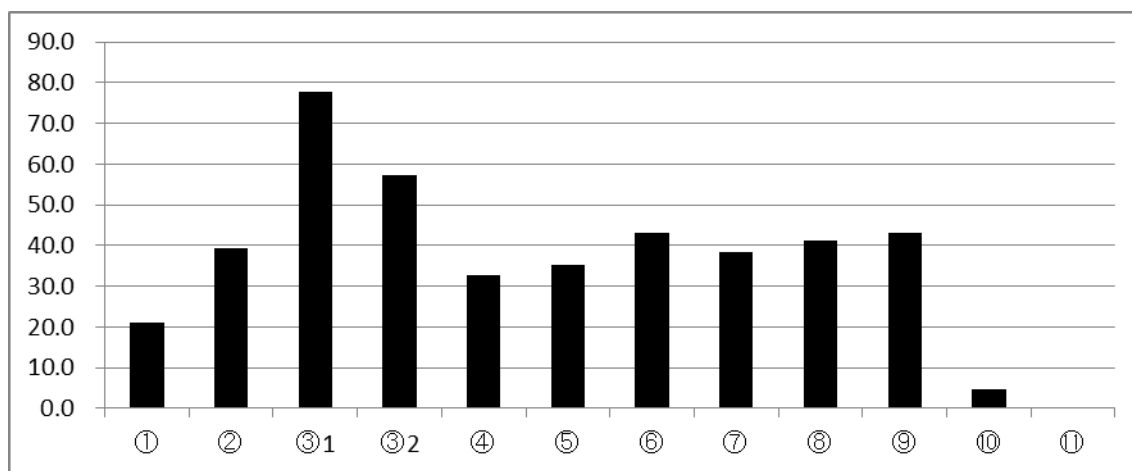


(13)英語を見て、書き写すことができた。



4. 小学校で、外国語活動で楽しかった活動を5つ書いてください。(複数回答可)

小学校外国語活動で楽しかったこと(%)



- ① 歌やチャンツ
- ② ALT の先生の話聞く
- ③ 〈1〉 *Hi, friends!* のテキストで、「聞いて線で結ぶ」「聞いて数字を書く」等の活動
- ③ 〈2〉 カード (カルタ) 取りゲームやおはじきゲーム
- ④ インタビュー・ゲーム (好きなもの、誕生日、できること、行きたい国等について)
- ⑤ 自己紹介や自分の一日を紹介する
- ⑥ アルファベットの文字を読む活動
- ⑦ 英語の単語を読む活動 (例 apple, dog, English 等)
- ⑧ アルファベットを書く活動
- ⑨ 英語の文字を書く活動
- ⑩ 英語劇
- ⑪ その他 (具体的に)

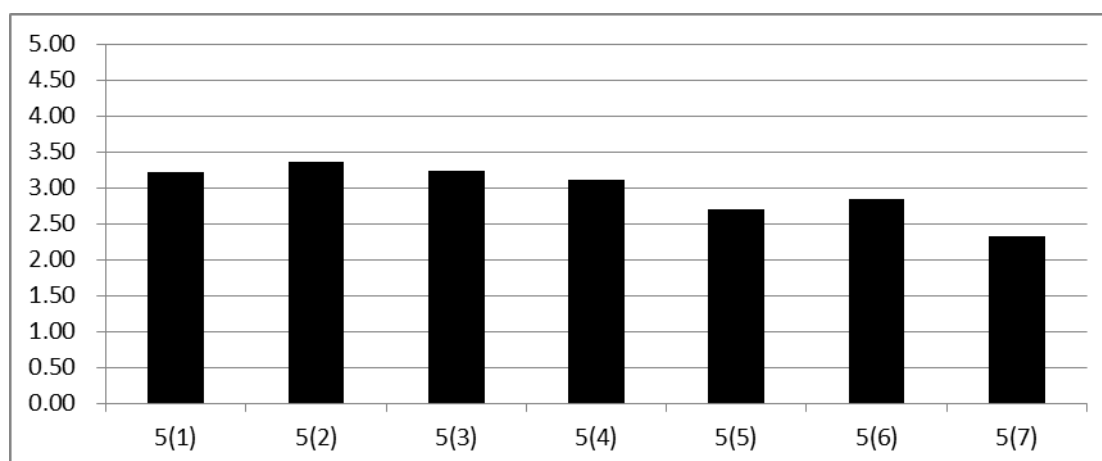
4. 英語コミュニケーション能力試験について

5.の英語コミュニケーション能力試験について、採点基準を次のように設定して採点した。以下の表2は採点結果、及びそれらをグラフにしたものである。

- 5: コミュニケーションを図る内容について、英語でほぼ書けている。
- 4: コミュニケーションを図る内容について、英語とカタカナで書けている。
- 3: コミュニケーションを図る内容について、カタカナで書けている。
- 2: カタカナで、答えている。
- 1: 無回答。誤答。
- 0: 答え方の方法が違っている。

表2: 5の回答の採点結果

	5(1)	5(2)	5(3)	5(4)	5(5)	5(6)	5(7)
平均点	3.23	3.36	3.24	3.11	2.71	2.85	2.33
標準偏差	1.18	1.48	1.40	1.31	1.66	1.68	1.48



<採点例>

文部科学省は「発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない（文部科学省 2008 : p.19)。したがって、本調査でも「コミュニケーションを図ることができたか？」を重視したため、綴りがわからない場合でも「音声」をカタカナ表記によって正しく答えていた場合には「正解」とすることにした。生徒には「英語がわからない場合は、カタカナで書いてもいい」ことを記した。図1は「ペンギン」がカタカナ表記になっているケースである。また、図2は、⑦「It's six o'clock.」は、正しく綴っているが、「⑦(教師の音声) What time do you get up?」に対する答え方としては、起きる時間を答えていることは理解できるが、答え方が不十分である。そのため「4」の評価とした。

図1：生徒の回答(1)

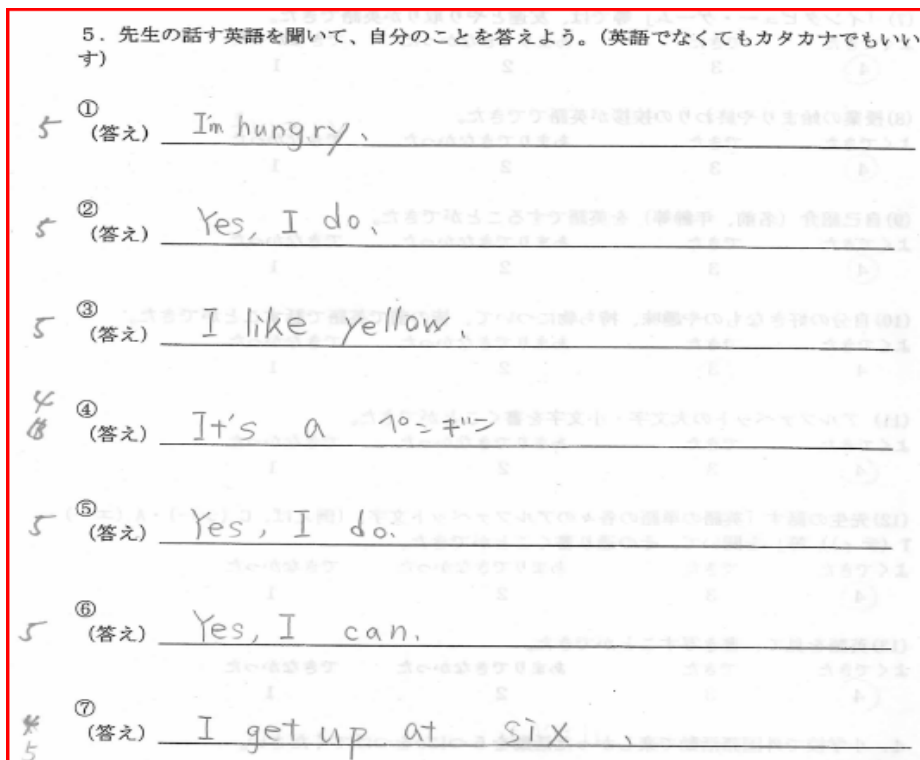
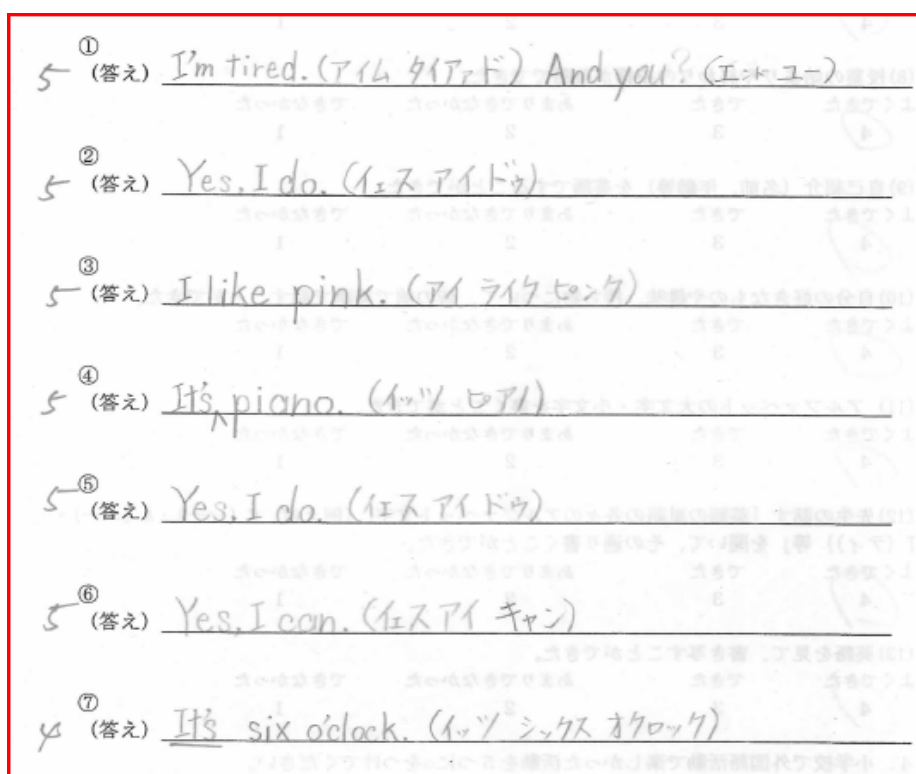


図 2 : 生徒の回答(2)



7. 先生の英語を聞いて、アルファベットの小文字を書いてみましょう。

	7(1)	7(2)	7(3)	7(4)	7(5)
正解	f	t	m	r	a
正解率	90.0	96.1	84.9	87.8	90.7

8. この単語の読み方をカタカナで書きなさい。

	8(1)	8(2)	8(3)	8(4)	8(5)	8(6)	8(7)	8(8)	8(9)	8(10)
問題	TV	Hello	ball	green	Book-store	Game	Police	happy	TAXI	POST
正解率	75.6	88.2	59.9	74.9	72.0	61.6	65.6	79.6	71.7	84.2

5. 結果とその考察

調査結果の中で、(1)「協力者の中学 1 年生のうち約半数が学校外で英語を学習している」ことから、教育熱心な家庭が多い地域であると思われる。また、(2) 小学校外国語活動については 8 割を超える生徒が「とても楽しかった」「楽しかった」と回答している。このことから、I 市の小学校外国語活動は順調に進められていると考えられる。さらに、(3) 生徒による自己評価では、「わかった」「よくわかった」「できた」「よくできた」という生徒が「全くわからなかった」「あまりわからなかった」「できなかった」「あまりできなかった」と思っている生徒よりもはるかに多かった。とりわけ、文字を読んだり書いたりする活動では、自己評価が高い傾向がある。一方、自己表現活動である「(10)自分の好きなものや趣味、持ち物について、皆の前で 英語で話すことができた。」では、自信のない生徒も見られた。これはある程度予想できた結果である。「英語で会話をする」と「英語でスピーチすること」は異なり、英語に限らず日本語であっても「人前で話す」ことが苦手な場合もある。

「(6)「インタビュー・ゲーム」等では、先生や友達に英語で自分の気持ちを伝えることができた。」「(7)「インタビュー・ゲーム」等では、友達とやり取りが英語できた。」等、コミュニケーションを図る活動においても、「あまりできなかった」という生徒の割合が 2 割程度いることがわかった。これまでの外国語活動の授業ではインプットが中心で、教師主導の活動が多かったのではないかと予想される。

文部科学省の「CAN-DO リスト形式の目標案」では、例えば小学校高学年では「話すこと」の「発表」では、「自分の考えや気持ち、事実などを、聞き手を意識しながら初歩的な英語で伝えることができる。」「与えられたテーマについて初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができ

る。」また、「やりとり」では、「聞いたことに相づちをうったり、感想を言ったりできる。」と示されている（文部科学省 2014）。

新しい小学校英語教育では、外国語活動で行ってきた簡単な日常生活の挨拶等、英語に慣れ親しむ活動にとどまらず、児童に自分の発話に自信を持たせ、相手に自分の気持ちを伝えることができるような表現活動を行うことが必要であろう。

文字については、大文字、小文字の両方（特に大文字）は大多数の生徒が書くことができていた。これは小学校 3 年生で学習する「ローマ字学習の効果」と考えられる。さらに、単語（綴り字）の読み」についても、おおむね良好である。しかし、文字と音声一致していないもの（ball）や二重母音を含むもの（Game）での正答率が低かった。

新しい小学校英語教育では「読むこと、書くことも含めた英語の運用能力を育成すること」が目標として掲げられている（文部科学省 2013）。したがって、「小学校の学習者」を対象にした小学生の発達段階を活かした「読むこと書くこと等の文字指導のあり方」の研究が急がれる。また特に、文字指導については、小中連携の取り組みの中から授業内容を組み立てることが望ましい。この調査で協力者にお願いした中学 1 年生は、2011 年度から小学校外国語活動が必修化された時に小学校 5 年生であり、2 年間小学校で英語を学習してきた最初の中学校 1 年生ということになる。小学校外国語活動では「聞くこと」「話すこと」といった音声言語を中心にするとし、中学校ではそのことを踏まえて、文字指導についてはすべて最初から扱っている。しかし、今回の調査の中で「5. ALT の英語の質問に対する答えを書かせる問題」では、英語のみを書いて解答した生徒が 3 割程度あった。これについて教科担任は「英語の質問に対して、英語を書いて答えようとしている生徒が一定の割合でいたことが驚きであった」とし、

中学校入学時の生徒の英語力を正確に把握し、授業を構成していく必要があると実感していた。このようなことを考慮すると、中学校では、入学してくる生徒たちが小学校でどのような外国語活動を経験してきたかについて、それぞれの校区内の小学校と十分に連携を取るなどの配慮が必要になる。またさらに、将来、小学校で「教科」としての外国語(英語)が実施される際にも、これまで以上に小学校と中学校の連携が重要になると考えられる。

参考文献

- Council of Europe (2004) 『外国語教育〈2〉外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』 吉島 茂・大橋 理枝 (訳) 東京：朝日出版社。
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版社。
- 文部科学省 (2012) 『Hi, friends! 1/2』 東京：東京書籍。
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/_icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf (2014年7月20日検索)
- 文部科学省 (2014) 2014年9月26日英語教育の在り方に関する有識者会議 (第9回) 配付資料。
- 齋藤早苗・アレン玉井光江 (2015) 「本気の英語教育：公立小学校での挑戦」 高橋美由紀・柳善和 (編著) 『小学校英語教育授業づくりのポイント』 ジェームス教育新社. pp.163-170.
- 高橋美由紀他 (2009) 『Hello, Kids! 1/2』 東京：開隆堂出版。
- 高橋美由紀・朱 炜 (2014) 「小学校英語教育における CAN-DO リストー中国

の英語教育の到達目標と CEFR を基にして」『日本児童英語教育学会
JASTEC 研究紀要』第 33 号、pp.93-112.

投野由紀夫（編）（2013）.『英語到達度指標 CEFR - J ガイドブック』東京：大
修館書店.

註(1)

本稿は「読むこと」「書くこと」を統合的に指導する小学校英語教育プログラ
ム開発」H26～H28 年度科学研究費助成金基盤研究（C）課題番号 26370725
（代表 高橋美由紀）の成果発表の一部であり、2014 年度小学校英語教育学会
全国大会（神奈川大会）にて研究発表したものに加筆・修正を加えたものであ
る。

謝辞

データの収集にご協力いただきました I 市の中学校の生徒の皆さん及び、渡辺
芳朗先生をはじめとする先生方、データ処理等を手伝ってくれた愛知教育大学
大学院生の市川美穂さん、齋藤友紀さんに感謝申し上げます。